



平成30年7月24日（火）岐阜県発表資料			
担当課	担当係	担当者	電話番号
中山間農業研究所	中津川支所	神尾・熊崎	直 通 0573-72-2711 F A X 0573-72-3910
農政課	農業研究推進係	早野・須賀	内 線 2804 直 通 058-272-1901 F A X 058-278-2680

## 夏秋トマトの多収穫栽培システムの開発

中山間農業研究所では、地域に密着した農業技術の開発と支援に取り組んでいます。

夏秋トマトは中山間地域の冷涼な気候を生かし、夏から秋にかけて生産される本県の主力農産物ですが、このたび、生産現場で課題となっている土壌伝染性の病害の克服や、収穫量の飛躍的な向上が可能となる生産システムを開発しました。

今回開発したシステムにより、生産者の経営安定につながることを期待されます。

### 記

#### 1 開発経過

- ・本県では、温暖な平坦地で冬から春に生産される冬春トマト用の多収穫栽培システム（名称：独立ポット耕栽培）を平成20年に開発した。その一方で、高温で日射量が多く、多量の養水分が必要となる夏秋トマトの栽培システムは確立されておらず、生産者から開発を要望されていた。
- ・このため、平成26年から開発に着手し、今般、従来の栽培方法に比べて2倍以上となる10aあたり20トン超を収穫できるシステム（名称：夏秋トマト隔離型培地耕システム）を完成させた。

#### 2 システムの概要

- ・専用の土を入れた大型のポットにトマトを1株ずつ植え、養液で育てるシステム。（農地土壌と隔離することで、土壌病害の発生リスクを低減）
- ・気温のみならず日射量にも対応できるセンサーを活用した本県オリジナル自動給液装置で、適切に養水分管理を実施。
- ・生産者が自ら設置できる簡易な構造とし、安価なセンサーや資材を用いることで低コスト化を図った（導入コストは、10aあたり200万円程度（設置費用を除く）であり、導入により増加が見込まれる収穫量約10トンの販売額約300万円を下回る）。

#### 3 今後の予定

- ・今年度は、1ha（生産者10名）で実証栽培に取り組んでおり、実証効果をふまえて栽培マニュアルを策定する。
- ・次年度以降、本格普及を図り、5年後には30ha程度の導入を目指す。

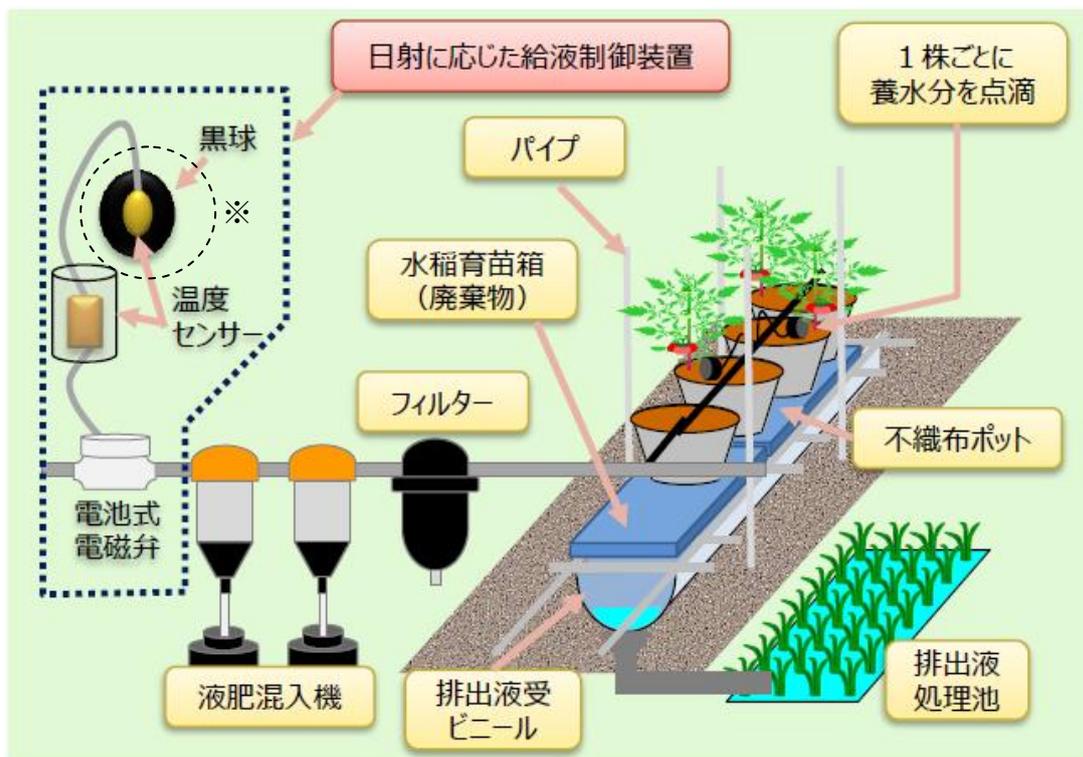
<従来の栽培方法との収穫量比較（平成 29 年）>

		収穫量 (t/10a)
新システム	研究所ほ場	約 24
	生産者ほ場	約 21
従来の栽培方法*（東濃地域平均）		約 9

※土耕栽培（農地土壌に直接、植物を植える栽培）

<システムの概要>

- ・日射に適切に対応するために、2つの温度センサーで気温と黒球内の温度（銅製の黒い球のため日射があるとすみやかに上昇）を測り、気温より黒球内温度が高い場合（太陽からの日射がある場合）のみ養水分の供給を行う。
- ・これにより、自動で、天気が良くトマトが養水分を必要とするときは頻繁に供給し、降雨時などあまり養水分を必要としない時は供給しないことができる。



※黒球温度計

- ・銅製の黒球の中に温度センサーが設置されており、日射による熱量を測定できる。
- ・熱中症予防に有効とされる「暑さ指数」の算出に用いられる。